2020 年度　竹村和子フェミニズム基金

事　業　成　果　報　告　書

※下記アドレスにメール添付でご提出ください。

竹村和子フェミニズム基金 〈t-fund@npo-ochanomizu.org〉

1.　個人または団体名（団体の場合は代表者名も記入）

女性史オーラルヒストリー研究会（代表者名：芹澤　良子）

2.　研究または活動のテーマ（課題名）

ジェンダー平等と高学歴女性

―1960 年代から 1970 年代に高等教育を受けた女性のライフヒストリーをてがかりとして―

3.　助成額

170,000 円

4.　実施期間

2020 年 7 月　～　2021　年　6 月

5.　実施状況

2020 年 7 月 3 日　第 1 回遠隔ミーティング

＊2021 年 6 月 18 日まで 30 回実施、インタビューの計画や談話の分析・検討を行った。

2021 年 1 月 13 日　第 1 回インタビュー

＊2021 年 5 月 31 日まで計 10 名に対しのべ 13 回の遠隔インタビューを実施した。

2021 年 4 月 5 日　グローバル研究会（小風秀雅お茶の水女子大学名誉教授主催）研究報告

2021 年 5 月 12 日　お茶の水女子大学基礎講義科目「お茶の水女子大学論」第 3 回を担当

6. 事業成果と自己評価

【事業内容】

主たる事業内容は、①勉強会の開催②オーラルヒストリー以外の関連資料の収集・調査③オーラルヒストリー及びアンケート調査の実施④研究成果の公表及び総括の４点である。本事業応募後にコロナウイルス感染症が拡大したため、出張・対面を伴う②③の実施が困難となったが、竹村和子フェミニズム基金事務局の御配慮の下、有益な成果を得ることができた。特に③については、当初予定の対面によるインタビューから、遠隔会議システム（Zoom、Skype）を利用したインタビューに切り替えた。インタビューは、お茶の水女子大学元教員と 1960～70 年代にお茶の水女子大学を卒業した 9 名の計 10 名に対し、のべ 13 回実施した。さらに、インタビュー調査の充足として、1960～70 年代にお茶の水女子大学を卒業した約 150 名に対してアンケート調査（書面・メール）を行い、うち 10 名にはさらに書面・メールによる追加調査を行った。

2020 年 11 月には共同執筆による論文を作成、2021 年 4 月 5 日にグローバル研究会（小風秀雅お茶の水女子大学名誉教授主催）にて研究報告を実施し、さらに 5 月 12 日にお茶の水女子大学の基礎講義科目「お茶の水女子大学論」の第 3 回「お茶大の歴史を学ぶ」として本事業

の研究成果を含めた講義を行い、受講学生との意見交換を行った。共同執筆論文は、オーラルヒストリーの実施により情報の拡充が見込まれたため投稿取り下げを行い、追加調査で得られた知見を加え再投稿の予定である 。

【自己評価】

1960～70 年代に大学ないし大学院で教育を受けた高学歴女性は、学生運動と、女性の社会進出という二つの社会的変化を経験しているが、インタビューの分析からは二点の特徴が明らかになった。

第一は、女子大学の社会的位置づけの特異性である。

女子大学の場合、大学側が学生運動に参加する学生を「保護」するという独特の対応があり、マス・メディア報道におけるバイアスも存在していた。お茶の水女子大学の場合、全共闘や他大学の紛争の応援など横断的運動への参加者はごく少数に限られ、学内問題が解決すると、運動が急激に沈静化・形骸化していったことがインタビュー・書面調査によって判明した。一方で、農村に嫁ぐことで三里塚闘争に「参加」した女子大学生は当時の同級生たちに強い印象を残しており、当時の女子学生にとって、政治的・思想的理想のための行動とジェンダーが複雑な関係にあったことがうかがえた。今後はこの特異性とバイアス、当時の女性に期待されたライフコースを考慮した上で、女子大学における学生運動の意義を再考する必要があると考えられる。

第二は、高学歴女性が獲得したスキルの非顕在化である。お茶の水女子大学卒業生の場合、1980 年代に女性の雇用が推進されると、企業内の女性の雇用・労働環境の整備に携わったり、女性労働者のキャリアプランの先例となっていったが、ライフコースにおける変化（結婚・出産・育児・配偶者の転勤帯同・介護など）でキャリアが断絶するケースも多かった。しかし、インタビュー・書面調査対象者の多くは、学歴や就業を通じて獲得したスキルを、別分野での再就職、団体の設立・運営、ボランティア活動など、社会運動や地域運動で発揮していた。キャリアが断絶した女性の場合、その活動は昇進や肩書のように累積した形では可視化されにくく、対象者のスキルや社会経験は、政治的・経済的には非顕在化しているといえる。

1960～70 年代に女子大学で教育を受けた高学歴女性は、学生時代は女性だけの環境で能動的に問題解決に関わり、就職後は逆に女性の少ない環境で、女性に関わる問題の解決に取り組むことになった。そして、前期高齢者の年齢となった現在も、高学歴女性たちはそれらの経験で得たスキルを活用している。今後は調査対象となる大学・年齢層を拡大し、上記 2 点の研究視角から論点をさらに抽出し、現代社会におけるジェンダー平等実現の一助としたい 。

7. 提出成果物

①グローバル研究会（2021 年 4 月 5 日開催）報告資料・概要

②共同執筆論文「大学沿革史にみる女子大学の学生運動」

③「お茶の水女子大学論」の第 3 回「お茶大の歴史を学ぶ」講義資料・概要